4月「Dialekt」
アントニア・シュルト

1.前回の投稿に続いて、今回は方言について書いてみたいです。

日本と同じく、ドイツでも地域によって言葉の様々な違いがあり、特にお年寄りや、田舎に住む人や労働階級の人であれば、方言を使う可能性が高いと言われます。私の場合は、母が南ドイツ人にかかわらず、少ししか方言を使わなかった記憶があります。たまに、無意識に標準語でない単語などを使ったりした時、我々子供のだれかに必ずそう指摘されたので、そのうち更に少なくなりました。父は北ドイツ人ですが、仕事などの関係で、方言があまりきつくないと思います。イントネーションとちょこちょこ単語の選択というレベルでした。全体的に見ると、方言の少ない家庭で育ちました。昔はこのことをそこまで深く考えなかったと思います。どちらかというと、少し嬉しかったかもしれません。結局、方言を別に格好よく思わなかったためです。

4月「Dialekt」
アントニア・シュルト

2. 最近ドイツ講座の準備の都合で、ドイツ語の起源などを調べたりして、色々と興味深いことが分かりました。今日、ドイツ語と呼ばれる言語の起源は、いわゆるインド・ヨーロッパ語族におけるゲルマン語の祖語とされます。紀元前400年に、インド・ヨーロッパ語族とゲルマン語族を分離させた「第一次子音推移」という子音の変化が起こり、結果的にゲルマン語とギリシャ語やラテン語などが分化しました。例えば、ラテン語との対照で言えば、「pater」（父)が英語で 「father」、ドイツ語で 「Vater」 となっていたり、「duo」(二)が英語で 「two」、ドイツ語で「zwei」 となったりしました。紀元後５世紀ごろに、英語が属する低地ゲルマン語とドイツ語が属する高地ドイツ語を分離させた「第二次子音推移」が起こりました。

4月「Dialekt」
アントニア・シュルト

3. 故郷の北ドイツで話されている方言（本当は方言より言語）は、低地ドイツ語（独：Plattdeutsch）と呼ばれ、標準ドイツ語と違って、第二次子音推移を経験しておらず、単語などを比較してみると、ドイツ語より英語やオランダ語に似ているところが多いと分かってきます。例えば、英語の　「Apple」（リンゴ）がオランダ語で「Appel」、低地ドイツ語で「Appel」、標準ドイツ語で「Apfel」となります。そういった例で、ヨーロッパの言語がある点では仲間だということ改めて気づき、方言で標準語の起源が表れてくるところも考えさせられました。どうみても、方言を知れば知るほど言語に関する理解が深まり、単語の豊かな方言を意識して使うと、ことばをさらに充実させたりできると思うようになりました。

方言を大事にしましょう！